

論文

スサノオ神話に由来する疫病退散祭祀の現代的意味

—神奈川県「蛇も蚊も祭り」を例として—

姚 琼

YAO Qiong

I はじめに

(1) 問題提起

疫病退散祭祀は、医療技術が発達していなかった古い時代では、疫病に対しての恐怖を表現するものの1つであっただろう。何千年もの昔、疫病の前に人間の力は蟻のように微小であった。そのために、人間以外の神の力を借りて疫病を乗り越えるというのは、日本だけでなく中国と韓国などでもよくある事例である。このような疫病を退散させる神を定期的に祀ることを通して、地域の住民たちが疫病を避けるという願望を表現する。

時代が変わり、医療技術が発達している現代では、インフルエンザやさまざまな流行病を治療する場合、古代のように祭礼に頼るしかなかった状況と比べて、病院へかかるなど科学の医療技術を利用する場合が圧倒的に多い。しかし、このような各領域で科学的な技術を利用することが可能な時代になっても、かつて疫病の前において人々にとって唯一の希望であった疫病退散祭祀は、いまだに日本の各地に残されている。

20世紀中期の高度経済成長期は日本の伝統民俗文化に激しい衝撃を与えた。疫病退散祭祀のような伝統民俗文化は形式的にまだ残されているが、時代の移り変わりによってその組織機関・構造から伝承者にとっての意義、さらに疫病退散の要素も非常に大きな変化があった。本稿はスサノオ神話に由来する神奈川県横浜市鶴見区生麦の「蛇も蚊も祭り」を例として、現代日本社会における疫病退散祭祀の変化を分析し、疫病退散祭祀の現代的意味を検討する。

(2) 先行研究の分析

本稿では研究対象をスサノオ神話に由来する疫病退散祭祀に設定するため、この課題に関する先行研究をスサノオに対する研究状況と疫病退散祭祀の研究、この2つの部分に分けることにする。

まず、これまでの研究がスサノオをどのように扱ってきたのかを振り返ってみよう。スサノオは8世紀に完成した日本最古の歴史書である『古事記』の神話巻の中の神様として最初に出てきた人物⁽¹⁾、後に完成した日本最古の正史である『日本書紀』神話巻の中でもスサノオが伊弉諾尊と伊弉冉尊が生んだ神様として出てきた⁽²⁾。このように、スサノオは最初に日本神話の中の神様として知られるため、スサノオに対する研究が日本神話の中で検討されることが多い。本稿は疫病退散祭祀を検討するので、日本神話に関する先行研究には触れないことにする。また、平安時代に入って、スサノオは

インドから伝来する疫病神牛頭天王と習合して、日本の疫病神として信仰されるようになった。本稿は、日本神話の神であるスサノオが、外来の神と習合して疫病神になったということについての先行研究に重点を置いて検討する。

吉井良隆は、牛頭信仰の伝播経路を史料で説明し、また古代八坂の地に鎮座する八坂神社は居住者帰化人によって早くから神仏習合し仏教的性格を持つことについて述べた（吉井 1962）。それによると、牛頭天王と類似する性格を持つスサノオは牛頭天王と習合するようになり、またスサノオは韓国の牛頭山に関係があるので、奇しくも両神が結び付く結果となったという。吉井の研究は牛頭天王がスサノオと習合した過程を歴史の方面から史料で明らかにした。

続いて、茂木貞純は、スサノオ神話に由来するスサノオ奉斎社を中心として、日本全国に分布しているスサノオ奉斎社のデータをまとめ、その中で津島天王社の鎮座と発展、祇園感神院の創祀及び京都祇園社の縁起と神徳について述べた。茂木の研究は、スサノオが疫病神として信仰される状況に関する有力な証拠を提供した（茂木 1998）。また、神道の方面からスサノオがいかにして日本神話の神から疫病神になったかの過程を述べた。

そのほか、鈴木耕太郎は『備後国風土記』逸文を基にして、明治元（1868）年3月に神祇官事務局が神仏判然令を發布したことで京都・東山に位置する祇園社を八坂神社と改めた時に、祭神の牛頭天王をスサノオにしたという長きに渡りよく知られてきた理解を再検討して、牛頭天王に「代わって」スサノオが祭神となったのではなく、そもそも八坂神社改称以前からスサノオも祇園社の祭神だったと論述した（鈴木 2010）。鈴木の見解は、スサノオが疫病神として信仰される歴史を再検討し、スサノオが牛頭天王と習合する前からすでに疫病神の性格を持っていることを説明した。

以上の先行研究から、スサノオは外来の疫病神である牛頭天王と習合する以前からすでに疫病神の性格を持っていたことが分かった。

一方、疫病退散祭祀についての先行研究はどうだろう。以下で、近代以降の疫病退散祭祀の研究を振り返ってみよう。疫病退散祭祀についてもっともよく研究されているのは、祇園祭の研究だと考えられている。祇園祭は日本三大祭りの1つといわれており、その信仰の対象は、京都の人々だけではなく、全国各地に勧請され、祇園祭・天王祭と呼ばれて全国に分布している。西角井正慶編『年中行事辞典』によれば、祇園祭は「祓と夏神楽を中心とするわが国の夏祭の形式を生み出す一つの源流」という（西角井 1958）。このように、日本の祭りの中でも重要な位置にある祇園祭は、近代から多くの研究がなされてきた。明治15（1882）年に和田三郎が編纂した『浄瑠璃大全』は、祇園祭の風景を記録している。その後の明治26（1893）年には、中村阿契が祇園祭についての研究書を発表した。現代になると、神道研究者真弓常忠が『祇園信仰——神道信仰の多様性』の中で、祇園信仰の文化的な源流を論じた（真弓 2000）。以上の祇園祭に関する研究では、主に祇園祭の発祥、祇園信仰の文化的要素、祇園祭・祇園信仰の展開を研究している。

ところで、祇園祭以外の疫病退散祭祀に関する先行研究を見ると、昭和34（1959）年に民俗学者大島建彦が『日本民俗学大系』第7巻「信仰と年中行事」の節で、正月前後に各地で行われる疫病退散儀礼に対する調査を通して疫病退散祭祀に触れている（大島 1959）。

大島に続き、民俗学者の三崎一夫は、日本全国で正月前後に行われる疫病退散儀礼を24例挙げて、2類型に分けて考えている。1つは、大晦日の年取りの夜に、村境や辻などから厄神を迎えてき

て、座敷や棚などで丁重にもてなしてから、元日の朝早くに元の所に送り、1年間は災厄をこうむらないようにと願うものである。2つ目は、大晦日から正月にかけて、神棚や歳棚のすぐそばに、疱瘡神のための供物をして、1年間は疱瘡にかからないようにと願うものである。三崎の調査によって、正月前後に行われる疫病退散の民俗資料が加えられた（三崎 1978）。

さらに、大島は、疫病退散儀礼の特徴をまとめた。大島によると、疫神の祭りの終わりにはそれらの神を送りだすとしても、ひととおりはこれらを迎え祭らなければならなかったという。が、最終的にはすばらしい福德に恵まれるとも信じられている。そのため、むやみにそれらの神を送りださないで、そのままとどめておいて、福運を祈ることも行われている。古来の記録の中でも、菅原道真の御霊のように、何かおそろしい災厄をもたらすものが、かえって靈験あらたかな神として崇められている。また、大島は、疫神の宿を祭ることに対して、日本古来の民間信仰の中に、疫神から福神への転換が、ごく自然な形で行われていたという（大島 1992）。

一方、浅野明は東北地方の疫神送りを調査した。浅野の研究によると、東北地方では疫神送りの時に、大きなワラ人形を作って、それを避疫神として祭っている。この人形には男根だけの場合もあるが、男女の2神を作って送りだす様子が見られる。それは、東北地方に多く見られる金勢大明神、コンセンサマと呼ばれ、子授け・安産・縁結び・和合の神とも呼ばれ、邪悪なものや災いを起こすものが入るのを防ぐ神として信仰されているものであり、男根を人形につけたとされる（浅野 1998）。

また、近世における流行神としての疫神に注目した研究の代表は、笹方政紀の論文「近世疫病神と妖怪——甘酒婆の全国的展開から——」である。笹方は「甘酒婆」を近世の流行神として取り上げて、同時に日本の各地にそれについての伝説がどのくらい伝播されたのかを分析した（笹方 2012）。笹方のこの論文では、流行神としての疫神が、どれだけ古い伝統を受け継いでいるかという問題を取り上げた。それは現代の疫神に対して研究する時に、非常に重要な問題であると思われる。『疫神とその周辺』という疫神に関する著書を書いた大島建彦も、疫神研究の課題を述べた時に、「特に現に疫神として祭られるものが、どれだけ古い伝統を受け継いでいるか」ということを強調した（大島 1985）。

本稿の研究対象である「蛇も蚊も祭り」は、疫病神であるスサノオがヤマタノオロチの神話から伝承された祭りが、現在では神話との関連がほとんど見つからないにもかかわらず、その伝承がかつて祭りに重要な位置を占めていたと筆者は推測している。本文は疫病神であるスサノオの神話を由来として行われている疫病退散祭祀を研究対象に設定し、神奈川県横浜市鶴見区生麦にある300年余りの歴史を持つ「蛇も蚊も祭り」を例として、スサノオ神話に由来する疫病退散祭祀の現代的意味を検討する。

II 研究背景

(1) スサノオ神話に由来する疫病退散祭祀の概況

スサノオは日本神話の中の最初の神であるが、外来の疫病神である牛頭天王と習合して古代から日本の疫病神になった。もともと話の世界で重要な役割を果たしていたスサノオが、どういう過程を経て今の疫神になったのか、疑問に思うところであろう。実はスサノオが神話の神様から疫神へ変化し

た問題については、これまでも多くの研究者により十分に論証されてきた。この問題についてはすでに定説になっているが、本稿ではスサノオ神話に由来する祭礼を研究対象に設定するため、スサノオがいかにして疫病神になったかということを変更して説明する必要があると考える。それを基にして、日本に分布している現代のスサノオ神話からそれに由来する祭礼の状況を説明したい。

スサノオは、日本のもっとも古い文献である『古事記』や『日本書紀』に記された神話では、天照大神の弟神として語られている。『古事記』では「須佐之男命」、『日本書紀』では「素戔嗚尊」と表記されているように、その名義は出雲の国の須佐郷に発祥した神の名と想像される。「須佐」の地は、簸の川（斐伊川）の支流に須佐川があり、川の洲に堆積した砂鉄を対象として製鉄に従事する男性集団を統率する首長（スサノオ）を意味するところから名づけられたと思われる（真弓 2000）。

記紀神話の中のスサノオ神話は大きく分けて5つあり、「スサノオの出生」、「スサノオ高天原でのいたずら」、「スサノオとアマテラスの誓約」、「八岐大蛇退治」、「スサノオ出雲」の神話となっている。これらのスサノオ神話がスサノオの神格を表したのである。スサノオ神話の中の1つである「スサノオの出生」神話で、スサノオの出生の時に、「泣きいさちる」ことによって人々を「夭死」させたとされる話は、疫病神として理解することができる。

また、平安時代から神仏習合思想の影響で、スサノオが牛頭天王の化身となり、疫病から守ってくれる神様になったと考えられる。鎌倉時代に成立した『日本書紀』の注釈書、卜部兼方著『釈日本紀』に引用されている『備後国風土記』逸文に次のような話が収録されている。「スサノオが武塔神という男に一夜の宿を借りようと願ったが断られる。それに対して、その兄の蘇民将来は貧しいにもかかわらずスサノオをこころよく迎え入れもてなしたという。スサノオは、そのお礼に蘇民将来に疫病逃れの方法を教える。それは病気になりかけたら、「蘇民将来之子孫」といって茅の輪を腰につけていれば、災いを逃れられるという方法である。蘇民将来の子孫は、スサノオの言うとおりに、疫病を逃れられたという」これは備後国「疫隅国社」の由緒であると記され、またこの話を京都の祇園社の「本縁」でもあるとしている（大林 2004）。

さらに、8世紀に編纂された『日本書紀』第四の一書に、スサノオ、新羅の曾尸茂梨（ソシモリ）に居て、そこから出雲に渡り、八岐大蛇を退治したという所伝がある。そのソシモリの場所については、江原道春川とされていた。戦前、朝鮮総督府は、そこスサノオの降臨地であるのはソシモリであると決め、神社を創建しようとした。終戦によって実現しなかったが、春川をソシモリとし、また祇園神、牛頭天王の故地であるとする説は依然としてある。韓国のソウルの北東約100キロに位置する江原道春川には、牛頭山という小高い山があり、頂上に饅頭型の墳丘がある。また、ソシモリとは朝鮮語で「高い柱の頂上」という意であり、ソトまたはソテという柱を立てて祭ったもので、そのソの音に、古代韓国語の「牛」の字を当てたとの説もある。すなわちこれがスサノオ牛頭天王の説の根拠になった所以である（井上 2011）。

以上に述べたように、スサノオと牛頭天王は疫病や災いを祓う力がある神として奉納されている。もっとも影響が深いのは京都の祇園祭で、平安時代の始め頃、都に疫病が流行して、多くの人々が死に絶えた。これを、政治的に失脚して処刑された人間の怨みによる祟りであろうと考え、この怨霊を退散することができるのは、スサノオのような偉大な神格の神に頼るほかないと、祇園社に祭られているスサノオに祈ったのである。

記紀神話でのスサノオは「泣きいさちる」ことによって人々を「夭死」させたとされ、疫病神として理解することもできる。こうした牛頭天王とスサノオとの神格の共通点、そして媒介としての『備後国風土記』逸文の存在によって、両者は結びついたと考えられる。

以上に述べたように、スサノオは神話の世界の神様から、疫病を退散させる力も持つ神様となった。このように、スサノオを疫病神として祭って、地域の疫病を防ぐために行う疫病退散儀礼はいまだに日本の各地に分布しているが、その現状はいかなるものだろうか。それについては表1から見てみよう。

表1が示す通りに、日本各地に分布するスサノオ神話に由来する儀礼の多くは、疫病退散のために行われる儀礼である。本稿はその中の神奈川県「蛇も蚊も祭り」の例を通してその現代的意義を分析してみる。

表1 スサノオ神話に由来する⁽⁴⁾儀礼

儀礼	都道府県	日程	願望
牛のり・くも舞	秋田県	7月7日	豊作、豊漁、悪霊退散
馬だし	茨城県	7月18、19日	疫病退散
蛇も蚊も	神奈川県	6月第1日曜日	疫病退散
大御幣つき	福井県	4月5日	疫病退散
やぶねり	三重県	7月13日	豊漁、疫病退散
綱引神事	大阪府	1月15日	疫病退散
蛇祭	大阪府	4月第1日曜日	疫病退散
お乙祭り	和歌山県	3月10日	厄除け、五穀豊穡
身隠神事	島根県	5月3日	厄除け
小童の祇園祭	広島県	7月第3日曜日	厄除け
綱打ち	奈良県	1月上旬の日曜日	疫病退散、五穀豊穡
ヤサラ	青森県	春の彼岸の日	無病息災
ひんここ	岐阜県	4月第2日曜日と 11月23日	五穀豊穡

(2) 調査地の概況

筆者は本稿の調査対象を神奈川県横浜市鶴見区生麦の「蛇も蚊も祭り」に設定した。まず、「蛇も蚊も祭り」が行われている地である生麦地区の地理的な背景から見てみよう。

生麦地区は、現在神奈川県横浜市鶴見区に属し、もともとは「生麦村」と「貴志村」と呼ばれていた。今の地区名「生麦」の起源は、徳川家康が江戸入国の時に生麦を取って街道を開いたことから、その名前が与えられたと伝えられている。また、生麦は海辺に近く、昔、生貝をむく作業をする人が多かったため、「生むき」が転じ「生麦」の地名の由来になったともいわれている。徳川幕府の代官小林籐之助の支配する頃の万延元（1860）年2月6日に、神奈川県奉行の御預り所となったが、明治元（1868）年4月には、神奈川県裁判所の管轄に入り、明治11（1878）年1月20日には、鶴見村に合併して、更に同22（1889）年4月1日、市町村制が実施された際には、生見尾村大字生麦と改められ、大正10（1921）年4月1日に、鶴見町大字生麦となって、昭和2（1927）年4月1日に、横浜市に編入された際、鶴見区生麦町となったのである（横浜市役所 1932）。

交通の方面では、京急本線の花月園前駅・生麦駅及びJR東日本鶴見線の国道駅があり、旧国道15号線が通過する。

生業の方面では、生麦の漁業は明治期に入ってから御菜八ヶ浦の伝統を維持し、東京湾内漁業では中核的な存在であったが、明治18（1885）年、潮田村、小野新田とともにノリ養殖に進出し、さらに貝類養殖では市域内外で先駆的な業績をあげた。もともとは徳川家康が天正18（1590）年8月に江戸に入って以後、江戸に人口が増えて大きな消費地となってからのことである。江戸城への御菜

御肴を定期的に献上するほか、御用船の曳き船など各種の船役を務める見返りとして、今の東京湾（当時は内海と呼ぶ）の漁猟に特権を認められていた專業漁業村落を御菜八ヶ浦と称していた。「御菜八ヶ浦」とは金杉、芝、品川、大井御林、羽田、神奈川獵師町、新宿の七浦に生麦浦を加えたものであった（横浜市役所 1985）。

現在では、生麦魚河岸通り・生麦魚介商組合加盟の専門鮮魚店が旧東海道沿いに建ち並ぶ。一般消費者も気軽に利用できる「朝市」は有名だが、小口卸売を專業としている店が5丁目に多く、正午以降はほとんど営業していない。また、住民数が一番多い5丁目には、サービス業に従業する人も多い。3丁目は旧国道に沿うため、飲食店・宿泊店が圧倒的に多い。下の表2が示す生麦地区産業大分類別事業所数と従業者数から見ると、生麦地区の、特に5丁目に卸売・小売業とサービス業が集中していることが分かる。

表2 生麦地区産業大分類別事業所数と従業者数⁽⁵⁾

町名	産業大分類別事業所数（単位：軒）							従業者数 （単位：人）
	総数	卸売小 売業	サービ ス業	飲食店 宿泊業	建設業	製造業	その他	
生麦1丁目	74	22	3	11	8	12	18	1,933
生麦2丁目	26	3	11	0	1	5	14	894
生麦3丁目	164	37	2	58	21	7	39	983
生麦4丁目	84	23	23	8	14	6	27	468
生麦5丁目	179	80	80	25	12	7	48	1,034

人口について、平成23（2011）年までの生麦は、表3が示すように、それぞれの人口総数が1丁目1,777人、2丁目17人、3丁目3,739人、4丁目4,207人、5丁目3,496人である。1丁目が旧国道に沿っており、キンビール横浜工場がある3丁目・4丁目・5丁目は住宅地である。2丁目は鶴見川に隣接していて、物流センターと造船工場が多く設置されているため、住民の人数はわずか17人だけである。また、4丁目は鶴見川に隣接した住宅地のため、5つの地域の中で人口が一番多い。

表3 生麦地区人口と世帯登録者⁽⁶⁾

町名	世帯数	人口			面積(A)
		総数	男	女	
生麦1丁目	1,135	1,777	964	813	0.438
生麦2丁目	16	17	15	2	0.357
生麦3丁目	2,180	3,739	2,059	1,680	0.181
生麦4丁目	2,204	4,207	2,199	2,008	0.213
生麦5丁目	1,946	3,496	1,858	1,638	0.243

また、幕末の文久2（1862）年8月21日に発生した薩摩藩主の父・島津久光の行列に乱入した騎馬のイギリス人を、供回りの藩士が殺傷した事件があり、歴史上それは「生麦事件」と呼ばれている。現在、生麦4丁目に「生麦事件発生現場の説明板」があり、事件発生現場であることを物語っている。

「蛇も蚊も祭り」はこのような歴史を持っている地区発祥の祭りである。江戸時代初期から今に至るまで300年もの間生麦地区に伝わる「蛇も蚊も祭り」の民俗行事は、残念ながら文献などの確たる資料によって、その由来を明らかにすることはいまだにできていない状態である。しかし、言い伝えによると、約300年前に始まって以来、中止したことがない。⁽⁷⁾茅で作った「蛇」体に悪霊を封じ込めて海に流したことに始まると伝えられている。平成4（1992）年10月1日に、横浜市指定無形民俗文化財として、生麦の原地区と本宮地区に伝わる「蛇も蚊も祭り」が指定された。現在、「蛇も蚊も祭り」は毎年原地区の神明神社と本宮地区の道念稲荷神社で、原則として6月の第1日曜日に行われている。しかし、茅の生育状態により第2日曜日になることもある。その理由は昔と違い茅の育成地が少なく、入手が非常に困難になったことと、「蛇」作りや祭礼には多くの人々の助力が必要になるので、休日を利用して行わざるを得なくなったことが挙げられ、確実に茅の入手が出来るような予定を組まざるを得なくなったためである。⁽⁸⁾

明治の半ば頃までは端午の節句に行われていたそうであるが、太陽暦に倣って、6月6日に行われるようになり、戦後ややしばらくして、6月の第1日曜日に行われるようになった。現在日本の祭礼は、参加しやすくするために、もともと平日に行っていた儀礼は休日或いは週末に変更するものが多く見られる。



写真1 写真2：昭和48（1973）年「蛇も蚊も祭り」の様子（写真提供：生麦蛇も蚊も保存会会長 青木さん）

神明神社は、本社が生麦の杉山神社で、御祭神が大和武尊である。当社の年間祭祀は、初午祭（2月第1土曜日）、蛇も蚊も祭り（6月第1日曜日）、盆踊り（8月第1月・火曜日）の計3回である。

一方で、道念稲荷神社の由来については『新編武蔵風土記稿』に「往還の中程字元宮にあり。海道より入口に石の鳥居をたつ。是を道念稲荷と云。前に蟠る松あり龍泉寺持なり。社地の入口左の方に石地藏4尺なるを建つ。稲荷神社木村（生麦町）中央にして東海道往還へ接す。宝暦三癸西二月再建す、とあり現在じゃもかも祭を行っている。」と記載されている。この記事のとおり、当社からほぼ50メートルのところに龍泉寺があり、本宮町の墓地の1つである。当社の年間祭祀は、正五九祭（正月・5月・9月の21日）、初午祭（2月節分祭の第1日曜日）、蛇も蚊も祭り（6月第1日曜日）の計3回である。その中で、「蛇も蚊も祭り」は規模的に一番盛大な祭りである。

Ⅲ 現代社会における「蛇も蚊も祭り」の姿

(1) 神明神社の「蛇も蚊も祭り」

神明神社は本社が杉山神社で、祭りの宮司と神主は、杉山神社の宮司・神主が担当している。原西町、原東町、柳町、住宅地町、生麦住宅地の5町の氏子たちが参加する祭りである。

京急線浦賀方面からの電車を生麦駅で降り、歩いて10分ぐらい進むと今回の祭りの会場である生麦神明公園に着いた。神明公園の中に、石で作られた蛇の形の彫塑があり、模様が現実の蛇形とはやや違って、その真ん中には砂場があるので、辺りの子供たちは常に彫塑を囲む砂場で遊ぶ。神明神社は神明公園の後ろにある。朝6時半から「生麦蛇も蚊も保存会」の関係者と町内の氏子が2頭の「蛇も蚊も」を作り始める。「蛇も蚊も」を作るには先ず6本の縄の端を社殿前の柱に縛って、保存会の方が鳥居に立ててその縄の端を持つ。その後、縄をまっすぐ引き伸ばし、4人1組のグループで「蛇も蚊も」の胴を編む。先に「蛇も蚊も」の頭から編み始めるが、1頭の「蛇も蚊も」を作ることは最低3人を必要とし、1人が茅の調整をし、もう1人が縄6本を手を持って、最後の1人が「蛇も蚊も」を編む。このように、1つの組がやっている間は、もう1つの組が休憩に入るなどして交代で回す。



写真3 茅を整理する

「蛇も蚊も」の胴を作り上げるのに約4時間ほどかかり、胴を作り終わると、頭の方を作り始める。「蛇も蚊も」の頭は縄に茅を巻いて、角は境内の神木榊を赤く塗って、「蛇も蚊も」の頭の上に刺す。「蛇も蚊も」の耳は在来種或いは中国産の枇杷の葉で作られる。目玉はツメタ貝を赤く塗って使用し、舌は菖蒲を赤く塗って使用する。そこで使われる菖蒲は観賞用のハナショウブとは違うもので、端午の節句の菖蒲湯に使う種類のものである。保存会の方の話によると、中国の端午の節句の影響を受けて、

「蛇も蚊も」の舌を菖蒲で編んだのが始まりで、菖蒲は魔よけの効果があるため、毎年必ず菖蒲で「蛇も蚊も」の舌を作る。しかし、近年菖蒲の値段が高くて入手困難になり、保存会は毎年菖蒲の入手に頭を悩ませているとのことである。

「蛇も蚊も」の頭の製作には6人が必要で、縄を横縦に組み合わせて作る。「蛇も蚊も」の頭を作り終わってから、尾を製作する。「蛇も蚊も」の尾のところに剣の形をした木をつけ、ベンガラで塗る。剣は神明神社の神木で赤く塗って剣の形にして「蛇も蚊も」の尾に刺している。尾に剣が入っていることについては文献『日本書紀』に記載されている。『日本書紀』のササノオ八岐大蛇神話の最後のところで大蛇を切る時、何か硬い物があると感じ、その硬い物を大蛇の尾から引っ張り出してみると、それは剣であったとある。これが後に天皇家の3種の神器として伝わる天叢雲剣である。

「蛇も蚊も」を全部作り終わると12時半になる。1時間休憩して、午後1時半から「蛇も蚊も」を担ぎ始める。

午後1時になると、神明神社の「蛇も蚊も祭り」は神事から始める。神事では、神主と宮司は2頭の「蛇も蚊も」と祭りの参加者をお祓いする。神事は20分で終わる。神事が終わってから、「蛇も蚊も」の巡行が始まる。5町の氏子たちを2班に分けて（原西・住宅地・生麦住宅地が1班で、原東・柳町が2班）、それぞれが「蛇も蚊も」を担いで各自の町内を巡行する。それに先立ち、2頭の「蛇も蚊も」を、神明神社の境内で社殿を中心に3回回す。「蛇も蚊も出たケイ、日よりの雨ケイ、出たケイ、出たケイ」と掛け声を唱えながら、町内への巡行が始まる。先ず1班の「蛇も蚊も」が鳥居をくぐって、東方向に巡行する。それから2班の「蛇も蚊も」も同じようにして西方向に巡行する。

生麦小学校の3年生は毎年「蛇も蚊も」を担ぐが、頭の方がやや重量があり堪えられないため、真ん中から尾の方を担ぐ。神主と宮司も2班に分かれて1班ずつ先導して巡行の道路を清め、保存会の役員がその後で一軒一軒人がいるかどうかと、「蛇も蚊も」を玄関に入れて欲しいかどうかを確認する。確認してから、「蛇も蚊も」を玄関に入らせる。このように、「蛇も蚊も出たケイ、日よりの雨ケイ、出たケイ、出たケイ」との掛け声を唱えながら、町内を練り回す。町内の民家やお店に着いたら、「蛇も蚊も」を玄関に入れて、3回以上上に持ち上げて、疫病を祓うとのことである。祓われる家にちょうど人がいたら、今年1年その家の疫病や災いがすでに祓われたということで、「蛇も蚊も」に感謝をする。町内の民家を全部回り終えると、午後5時半になる。祭りで掃除や担ぎ手を手伝う小学生の一部は先に帰るが、まだ残っている小学生は学校の先生からご褒美としてお菓子をもらって帰る。

祭りが終わったら、「蛇も蚊も」を神明神社に置く。昔は、翌日に横浜の海に流していたが、現在は、翌朝10時に神社で保存会の人「蛇も蚊も」を燃やす。これで、「蛇も蚊も祭り」が終了する。

(2) 道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」

祭礼当日には、道念稲荷神社へ続く主な道に、「蛇も蚊も祭り」の横断幕が何箇所か張られている。道念稲荷神社へ近づくと、祭りの雰囲気だんだん強くなる。

道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」は6月の第1日曜日午前8時に始まる。始めに、町会長が挨拶して祭りの開催を宣言する。続いて、杉山神社の宮司2人が、「蛇も蚊も祭り」の参加者に神事を行う。祭りの前週に編み終わった3頭の「蛇」は、神社本殿の前に置かれて、その前にはお供え物が並ぶ。宮司はお供え物に向かって3頭の「蛇」に祓いを行ってから、参加者全員にお祓いをする。その後宮司は玉串を捧げ、「蛇」に御神酒を飲ませ、塩で清めて出発する。神事はほぼ20分で終わる。神事の続きに、司会を務める町会長が祭りに来た鶴見区役所と生麦小学校の役員たちを紹介する。最後に、保存会会長をはじめ、各町会役員が参加者に挨拶をする。そして、祭りが始まる。

東部本宮と西部本宮に3頭の「蛇」を1頭ずつ出して鳥居から巡行に出発する。生麦囃子会は軽トラックで囃子を演奏しながら、「蛇」が巡行する大通りに出てゆっくりと「蛇」の後ろについていく。まず南行する「蛇」が鳥居をくぐり、出て行く。続いて西行、北行と出て行く。「蛇」は神主と宮司が先導し、その後4、5名の役員が付き、頭の部分を大柄な子供か大人が担ぎ、胴体を20名以上の子供が担ぎ、所々に子供会の大人や町会役員が付き添う。昔は担ぎ手に女性は少なかったが、近年子供の母親或いは専業主婦に担いでもらう場面が多くなってきた。昔より住宅地が増えるに従って、住民の数も多くなっている。このようないきさつで、祭りに参加する人も多くなり、より多くの人

担げるようになったために「蛇」の尾のところに1本の縄をくくりつけ、「蛇」を長く作るようになった。

「蛇も蚊も出たケイ、日よりの雨ケイ、出たケイ、出たケイ」と大声で唱えながら町中を練り歩き、一軒一軒の玄関口に「蛇」の頭を入れ「わっしょい わっしょい」と掛け声で囃し立てる。神主か宮司が一番前で「蛇」巡行の道にお祓いをする。後ろについている保存会の役員が一軒一軒のドアを叩き、人がいるかどうか、「蛇」を玄関に入れて欲しいかどうかを確認する。確認できたら、「蛇」を玄関に誘導する。昔から毎年ずっと東部本宮と西部本宮二町の辺りを巡行し続けるので、大部分の住民とは知り合いであり、みんな「蛇」が来るのを楽しみしている。「蛇」の巡行に間に合わなかった住民が「蛇」を追ってきて、帰りの時にもう一度家に来てもらいたいという人もいた。また、「蛇」が来る前に、すでにドアを開けて玄関に「蛇」が入りやすいようにきれいに清め、待っている家も少なくない。祭りに参加していなくとも、祭りに期待する住民の気持ちが明確に分かった。

「蛇」を玄関まで入れた住民が多数を占めているが、葬式を行ったばかりということで祭りを避ける家もある。また、家にいないか何かの理由で「蛇」に入って欲しくない家も何軒かあったそうである。約2時間かけて町内の巡行が終わったら、3頭の「蛇」が生麦小学校の入り口で待ち合わせる。3頭の「蛇」が揃ったら、保存会の会長と生麦小学校の校長から少しお話があり、その後校庭に入る。次に、3頭の「蛇」が絡む場面になる。先ず「蛇」を胴体部分だけにする。小さい子供を「蛇」から離す。差配の笛太鼓の合図で3頭が中央に突き進み、頭を高く上げ絡み争う。絡み合っている「蛇」に水かけられる。水をかけられ囃し立てられると、大人も子供も揉み合いとなる。尾の方は頭の絡み具合で大きく振り回される。ケガ防止のため早めに制止する。

この絡みを3回以上行う。担ぐ人と見る人がみんなビショ濡れになる。「蛇も蚊も祭り」でもっとも勇壮な場面は、対抗意識を燃やして行うこの絡みの場面である。絡み終わったら、3頭の「蛇」を担いで学校を出て神社に戻る。町の境に着いた「蛇」は、境に1頭ずつトグロを巻き、頭を本宮の方に向けた状態で並べられ、参加者が「蛇」の後ろに並ぶ。神主と宮司が3頭の「蛇」に向かってお祓いをしてから、参加者全員で3本締めをする。

町の境から本宮道念稻荷神社までの旧東海道を、3頭の「蛇」が並んでお練りを行う。巡行の時と同じく、囃子保存会を乗せた軽トラックが囃しながら進む。その後を囃子保存会の踊り手が舞いながら

ら進み、高張り提灯に続いて「生麦本宮蛇も蚊も保存会」会長、宮司、保存会役員世話役と続き、3頭の「蛇」が「蛇も蚊も出たケイ、日よりの雨ケイ、出たケイ、出たケイ」と全員で唱えながら進む。

道念稻荷神社の前まで来ると、出発時と同じように順次鳥居をくぐって境内に入る。「蛇」は社殿の前にトグロを巻いて置かれる。そこで1頭の「蛇」を解体し、頭を燃やす。焚き上げている間、獅子舞、お囃子が行われている。儀礼に参加する小学生にお菓子和柏餅が配られ



写真4 生麦地区センターに展示された「蛇」

る。子供にあげるお菓子は年齢により内容が異なる。「蛇」のお焚き上げが続いている間に、世話役により祭礼の後片付けと、直会の準備が行われる。本宮地区の「蛇」は、午前中に行われる。原地区の「蛇も蚊も」は、午後から行われる。従って宮司は早々に原地区の方へ向かうため、直会には出られない。

残りの「蛇」も処分されるが、他の2頭の「蛇」は生麦地区センターの資料館或いは博物館に展示される。筆者が調査した2013年に、生麦地区センターに「蛇も蚊も祭り」で使った「蛇」と展示用の「蛇」が展示されていた。また、「蛇も蚊も祭り」を舞台に出演させたいという依頼があった時には、儀礼で「蛇」を丁寧に扱った後に手直しをするか、或いは新たに舞台用に「蛇」を作る。

以上が「蛇も蚊も祭り」のあらましである。このように、道念稻荷神社の「蛇も蚊も祭り」は、地域1年間の無病息災を願って行われるものである。

IV 「蛇も蚊も祭り」の変化

「蛇も蚊も祭り」は300年余りの歴史を持つ疫病退散儀礼で、主催地生麦地区の誇れる民俗文化である。特に、平成4(1992)年に「蛇も蚊も祭り」が横浜市は無形民俗文化財に指定された後から、さらに地域の人々に重要視されるようになった。横浜市は無形民俗文化財に対する補助金を出し、またニュース・新聞・インターネット上で「蛇も蚊も祭り」の宣伝を数多く行った。現在は、取材者や歴史と民俗文化に興味を持っている人たちに「蛇も蚊も祭り」の貴重な資料を提供しながら、横浜市の無形民俗文化財としての民俗文化の一翼を担っている。一方で、当初、地域の疫病を退散するために始まった「蛇も蚊も祭り」は、長い年月を経た今でも当初と同じ意味合いを持っているかどうかはさだかではない。また、一見にぎやかな祭りに見えるが、主催地域の人々にとって、現在のこの祭りはどんな存在なのか。

これらの疑問について、本稿は以下の節に分けて、「蛇も蚊も祭り」の組織機関・構造・伝承者にとっての意義・疫病退散要素の変化から解決の糸口を見つきたい。

(1) 組織機関の変化

現在の「蛇も蚊も祭り」は「生麦蛇も蚊も保存会」と「生麦本宮蛇も蚊も保存会」の2つの保存会により催されている。筆者の現地住民からの聞き取り調査によれば、この2つの保存会はともに「蛇も蚊も祭り」が横浜市の無形民俗文化財に指定された90年代頃に発足したとのことである。300年余りの歴史を持つ祭りに対して、これらの保存会の成立は決して早いとはいえない。では、この2つの保存会はどんなきっかけで発足したのか、また保存会がない時代にはどの組織が祭りを主催していたのか。この節では以上の疑問を解決したい。

まず、保存会の発足について、筆者は2つの保存会の会長に聞き取り調査を行った。「生麦蛇も蚊も保存会」の会長は現在80歳のA・Gさんで、会社を定年退職してから保存会に参加して現在会長の職に就いている。A・Gさんの話によると、「生麦蛇も蚊も保存会」は1990年になって発足させようという気運が町内会の中で高まった。90年代に入って、「蛇も蚊も祭り」を横浜市指定無形民俗文化財に登録するために、横浜市教育委員会から生麦の町内会に至るまでたくさんの人々が尽力した。

その1つが「蛇も蚊も保存会」を発足させることであった。A・Gさんは90年代に定年になり、その時までずっと町内会で「蛇も蚊も祭り」の世話をしていたお父さんに代わって、「生麦蛇も蚊も保存会」を設立し会長を務め始めた。

一方、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」も同じく、横浜市の無形民俗文化財に指定される時の90年代に発足した。横浜市から補助金をもらうには保存団体が必要となるので、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」を発足させた。つまり、保存会という組織機関は無形民俗文化財に指定されると同時に発足したものである。

では、保存会が成立する前に、「蛇も蚊も祭り」を主催していた組織とはどのようなものだったのだろうか。この点は、「蛇も蚊も祭り」に70年以上に渡って参加し続けるT・Nさんへの聞き取り調査を通して述べる。

「蛇も蚊も祭り」は江戸時代中期から始まったといわれるが、残念ながら現時点では最初の歴史的な記録は見つからない。そのため、「蛇も蚊も祭り」の最初の形式は現在の住民に対する聞き取り調査によって推測するしか方法はない。筆者は2012年度と2013年度の「蛇も蚊も祭り」に参加し、この2年間で「蛇も蚊も祭り」の主催者と参加者のうちの何人かに聞き取り調査をした。その中で、一番ご年配なのはT・Nさんである。T・Nさんは昭和5（1930）年に生麦で生まれ（当時は生麦村）、昭和45（1970）年までは生麦で漁師をして日々の生活を送っていた。しかし、京浜工業地帯に位置する生麦の埋め立て作業の進行に伴って、生麦の漁業は大きな影響を受けた。明治中期から昭和初期にかけて生麦の重要な産業であるノリの生産も、京浜工業地帯の発展の影響を受けて衰退した。その影響はT・Nさんの生活にも及び、T・Nさんは昭和45（1970）年に横浜の会社に入って普通のサラリーマンになった。

T・Nさんの家族は11人いる大家族であった。その内T・Nさんは5番目の息子で、下に3人の妹と1人の弟がいる。T・Nさんの父親は生麦本宮町の役員であったため、「蛇も蚊も祭り」の保存会を発足する前から毎年祭りの準備段階から参加していた。それ故、T・Nさんは子供の頃から毎年父親と一緒に茅の準備から祭りの最後まで参加した。また、「蛇」の作り方も父親から教えてもらった。当時の日本は結婚しても両親と一緒に住むのが当たり前の時代で、祭りにも家族単位で参加することが多かったのである。T・Nさんは「子供の時、「蛇も蚊も祭り」の日になると、本宮全員の子供たちは必ずお父さんたちと一緒に「蛇」の製作を手伝ったり祭りを楽しんだりしたものです」と語ってくれた。しかし、昭和30年以後に、T・Nさんの一番上の兄が結婚して家を出て以後、T・Nさんのほかの兄弟もみんな結婚して生麦の実家から出ていき、T・Nさんだけが実家に残りそのまま住むことになったため、家族の中ではT・Nさんだけが現在まで毎年「蛇も蚊も祭り」に参加しているということになる。

T・Nさんが子供の時はちょうど昭和初期ごろで、家族一緒に住むのが一般的だったので、祭りのハレの日には家族単位で参加することがほとんどであった。当時の町内会は祭祀の組織機関でもあったため、町内会の役員たちの家族を含めて住民全員が参加するのは当たり前のことであった。当時は祭りの開催日がすでに日曜日になっていたため、小学生たちも積極的に参加した。また、漁師たちは1日漁を休んで地域1年間の疫病退散のため、家族を連れて祭りに参加した。

T・Nさんの事例を見て、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」が発足する前に、本宮町内会が組織機関の

役割を果たし、地域の住民が家族単位で毎年の「蛇も蚊も祭り」に参加していたことがわかる。

90年代に保存会が発足する前は、「蛇も蚊も祭り」は、住民に代々受け継がれ、また町内会で継承されていた。大正10(1921)年4月1日、生見尾村は、町制が敷かれ鶴見町と改称した。大字としては、旧村名がそのまま引き継がれ、生麦村は大字生麦となった(鶴見区史刊行委員会1982)。昭和2(1927)年4月に、鶴見町は横浜市に編入され、同年10月の区制実施により鶴見区になって、生麦町が鶴見区に所属するようになった。生麦町になると同時に、生麦町内会が発足した。町内会は定期的に祭礼を行う重要な組織となった。

「生麦蛇も蚊も祭り保存会」の発足によって、祭祀を実施する組織が、町内会から保存会へ変わることとなった。90年代に「生麦本宮蛇も蚊も保存会」と「生麦蛇も蚊も保存会」が発足した。当時の保存会のメンバーのほとんどは、本宮町内会の役員と、町内の地元出身の住民と毎年「蛇も蚊も祭り」に参加する人たちであった。T・Nさんは本宮の出身で、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」に参加した。彼は当時の保存会の中で「蛇も蚊も祭り」に参加した年数が一番多くて「蛇」の作り方に詳しくあったため、「蛇」製作の監督を担当した。毎年1回だけの行事なので、参加者は「蛇」の編み方を覚えることができないと語っていた。毎年、「蛇」の編み方を統一させるために、T・Nさんは必ず現場で「蛇」を編む作業を指導する。T・Nさんはお父さんから教えてもらった「蛇」の編み方を今の保存会の役員たちに教えて、祭りでもっとも重要ともいえる「蛇」を保存するように努めている。

保存会が発足すると同時に、「蛇も蚊も祭り」の横浜市指定無形民俗文化財への登録申請が始まった。保存会と横浜市教育委員会の努力で、平成4(1992)年に「生麦蛇も蚊も保存会」と「生麦本宮蛇も蚊も保存会」が主催する「蛇も蚊も祭り」は、2つの保存会で同時に横浜市指定無形民俗文化財に登録された。

「生麦蛇も蚊も保存会」は、「蛇も蚊も祭り」を維持管理し伝承していくことを目的とする集団である。保存会の役員は会長1名、副会長2名、会計1名、監事1名で構成される。そのなかで、会長は委員の互選により選出され、その他の役員は会長が指名する。役員任期は2年とし、再任を妨げない。昭和52(1977)年6月に保存会の名簿が作られ、昭和53(1978)年3月31日より保存会規約が施行されている。保存会は原西自治会、原東町内会、柳町町会、住宅地町内会、生麦住宅自治会の氏子住民で構成し、選出された委員を以って委員会を構成し運営している。「生麦蛇も蚊も保存会規約」によって会長は保存会委員の互選によって選出されるが、実際には代々の会長は、前の会長に指名されて選ばれてきた。保存会は、茅刈場の選定、茅の成長状況の確認、茅の道路使用許可申請、火爆発生届の届出、巡行路線の確認の準備活動を行う。「蛇も蚊も祭り」の期間に、材料の調達、「蛇」作製、巡行、焼却等の役割を担当する。

一方、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」は、会長1名、副会長2名、会計1名、世話人20名以内と監査2名の組み合わせになっている。会計・世話人・監査が保存会会長と副会長を選任し保存会の役員は、生麦本宮町会により推薦され、会長・副会長の両名の合意で決められる。保存会会長は保存会の代表で、副会長が会長を補佐し、会長が事故などでその職務を遂行できない時に、その職務を代行する。会計は会計業務を担当し、世話人は祭礼行事を分担して執行し、監査が財務の執行を監査する。役員任期は2年とするが、補欠役員任期を前任者の残任期間とし、再任することができる。実質的には再任を繰り返すため無期といえる。

保存会は、生麦本宮地区に継承されてきた「蛇も蚊も祭り」の伝統を守り、後世への伝承と併せて、活動を通して生き生きと豊かで潤いある地域社会にすることを目的とする。保存会は主に「蛇も蚊も祭り」を主催するほかに、杉山神社元旦祭、節分祭、例大祭、道念稲荷神社正五九祭、道念稲荷神社年越行事、町内獅子舞にも参加する。保存会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。保存会の経費は、奉納金、横浜市文化財管理奨励金、協賛金、研修会費、預金利息に充てる。

平成4（1992）年に横浜市指定無形民俗文化財になってから、横浜市教育委員会事務局生涯学習文化財課は、毎年保存会に文化財管理奨励金を交付している。その奨励金は、看守・清掃及び防護等の軽微な補修など、文化財の通常の維持管理にかかわる経費に充てられる。平成15（2003）年以前には、管理奨励金が毎年15万円で、以後、7万5千円となっている。

「蛇も蚊も祭り」のほかに、保存会の役員は杉山神社の奉賛会に所属していて、元旦祭（1月1日）、節分祭（2月）、盆踊（8月5日、6日）と例大祭（8月）の祭祀活動に参加する。原地区の「蛇も蚊も祭り」は保存会が主催者になる一方で、地区の老人会、婦人会、子供会が祭りへ協力する組織になる。老人会のメンバーは「蛇も蚊も祭り」に参加する年数が多く、「蛇」を編むのに詳しい人が多いため、祭りの当日に「蛇」を編むことを担当する。婦人会は普段地区のイベントの料理の用意を担当するため、「蛇も蚊も祭り」の時も主催者の昼間のお弁当、参加者へのお菓子、祭礼が終わる時の直会の準備を担当する。また、子供会は、年齢層が低い子供たちが中心となるので、祭り当日に「蛇」を巡行するチームに入れられ、「蛇」の尾の部分を担当することになっている。地区の老人会、婦人会、子供会は祭りのそれぞれの部分を担当し、祭りが順調に行われることに必要な力を提供している。

以上、「蛇も蚊も祭り」の組織機関が町内会から保存会に変わる過程を見てきた。保存会は祭礼を挙行・伝承することが主な役割であるが、地域とは緊密な関係を持つ組織のため、地域と関連するイベントにも参加する。保存会のメンバーは町内会の役員を担当する人が多く、それと同時に地域の老人会などの組織に参加する場合もある。保存会を発足させるきっかけは無形民俗文化財に指定されることを目指したことといえるけれども、単にそのために新たな組織を作ったわけではなく、保存会のメンバーから見ると主に祭りに熱心な人が保存会の役員を担当し、彼らがそもそもの祭りの主催者であったともいえるのである。この面から見ると、保存会は祭りの発展に従って形成された組織でもあるのではないだろうか。一見、祭礼の組織機関は家族間での伝承から町内会に変化し、また町内会から保存会に変化したように見えるが、実際にはどの組織も地域伝統の民俗文化に情熱を持っている住民の人々が作った組織という点では同じではないだろうか。

（2） 祭礼の構造的側面

祭礼の構造的側面には、この百年で変わった点があった。昭和初期ごろ、生麦は半農半漁の村で、町内の通りにはたくさんの井戸があった。「蛇も蚊も祭り」の日に、「蛇」を担いで町内を巡行して、井戸に着いたら、井戸から水を出して「蛇」とそれを担ぐ氏子たちに水かけをすることがあった。井戸の水がなくなるに従い、現在では生麦小学校で3頭の「蛇」が絡む際に水かけをするという形に変化した。

また、以前は生麦駅の後ろの山に自生している茅を刈っていたが、住宅地が増えるに従って、山の

茅が少なくなった。生麦近くの浜が埋め立て地になってからは、大黒町に茅が生えているのを見つけたので、大黒町の茅を利用するようになった。

昭和20(1945)年以前には道念稻荷神社は2頭の「蛇」を作っていた。大正時代には、本宮と本原は1つの町会であり、雄と雌1頭ずつの「蛇」を作っていた。また、この2頭の「蛇」を村の境にトグロを巻くように置き、祭りを行っていた。その後町内の人口が増えたので、「蛇」を担ぐことになった。当時は家が密接しておらず敷地に余裕があったため、「蛇」を担ぐ時に、バックせず済んだ。昔は、祭礼が終わったら、漁船に「蛇」を乗せて東京湾の中央まで行って、「蛇」を海に流していた。しかし、海風によって岸辺に吹き寄せられるのが不吉と思われたため、神社で燃やすことになった。しかし、燃やす際の煙があまりにも多いと消防団に指摘されたため、1頭の「蛇」の頭だけを燃やすことになった。

また、漁師さんが魚を網で船に引くときに使う太い縄が、現在祭りで使われる縄になっている。昔は、男性だけが「蛇」を担ぐことができたと推測する。というのも祭礼の中で唱える言葉「蛇も蚊も出たケイ、日よりの雨ケイ、出たケイ、出たケイ」は「蛇も蚊も祭り」を最初に行う時に唱える言葉で、現在までそのまま変わらず祭礼の中で使っているが、この文の口調から見れば男性言葉であるので、元来「蛇も蚊も祭り」は、男性だけが参加していた祭りであったことが推測できる。

「蛇も蚊も祭り」の起源地である道念稻荷神社では、毎年端午の節句の日に祭礼を行っていたが、正確な時期は定かではないものの、少なくとも戦後からは神明神社と道念稻荷神社は別々に行うようになった。その後、祭礼の日にちは元々の端午の節句から6月6日に変更になり、さらに戦後からは現在の6月第1日曜日になった。祭礼を行う場所と日にちの変更については現代化が進むに従ってやむを得ず起こった変化と見なすことができる。

かつて祭礼の巡行は、住民に大いに歓迎され、部屋まで入って家族全員にお祓いをしていたが、現在では中に入らせたくない家もある上、部屋のもを壊したケースもあったため「蛇」が入るのは玄関までとなった。70年代に生麦住宅団地が建てられてから、マンションに「蛇」が入るのが困難になったため、住宅団地へは巡行しないことになった。その結果、「蛇も蚊も祭り」の巡行順路沿いの住民をお祓いする形式が変わった。

「蛇」の製作の過程は、とくに変わりはないが、「蛇」の舌を作るための菖蒲が本来疫病退散の機能を持つとされる植物なので、毎年必ず菖蒲を使って「蛇」の舌を作っていたが、近年菖蒲の入手が困難になり、店で買うと値段が高いため、菖蒲の代わりに「蛇」の胴を作る材料であった茅を使って舌を作るようになった。さらに、神事の供養物にも変化があった。神事の供養物は元々生の鯛を主としていたが、現在では、果物と野菜のみに変わった。その原因を追究すると、元々漁師の参加が中心だったため、生の鯛が簡単に手に入り供養物とすることができたが、漁師が居なくなった現在の本宮地区ではわざわざ鯛を購入する必要があるのか協議した結果、より入手が容易な果物と野菜を供養物にすることとした。地域の生産活動の変化に伴って供養物も変化するというのは、よく見られる祭祀の変化の1つである。時代により生産や収穫量が減少したために供養物に変化したりあるいは消失したりするというのはよく理解できる。また人々の意識も、供養物が神様に捧げる神物から、ただの神事の一環であるという意識に変化したのである。

以上のように、現在に至るまでの祭礼が行われる時間、場所、道具、材料などの点から見ると、

「蛇も蚊も祭り」は構造的な面が少しずつ変化していった。その原因を客観的な面から追究すると、地域の経済的な発展に伴う人口の増加が、祭礼の日、場所、巡行順路及びお祓いの形式に大きな影響を与えたことが分かる。また、主観的な面から考えると、主催者と参加者の祭礼に対する意識の変化が祭りの変化にも関係していると思われる。このような変化は時間の流れとともにさらに多くの変化が出てくるものと推量される。それが地域の民間信仰に対して良いのか悪いのかは簡単に言い切れないと思うが、祭礼の伝承にとっては深刻な問題となる。

(3) 伝承者にとっての「蛇も蚊も祭り」の意義

「蛇も蚊も祭り」は、そもそも疫病が地域に流行っていたため疫病退散を祈願するために行われていた祭礼である。しかし、すでに300年余りの歴史を持つこの祭礼は、現在では参加者や地域の人々にとっての観念的な側面が以前のものとは少し変わってしまったように思われる。以下では、先にも紹介したA・Gさんの事例を見ながら、参加者の「蛇も蚊も祭り」に対する観念の変化を考える。

A・Gさんは昭和8(1933)年に一家の長男として横浜市生麦に生まれた。1957年に結婚して、その後も生麦に住んでおり、電気工事の監督の仕事をして30年以上していた。1993年に定年退職してから、地域の活動に熱心に参加するようになった。お父さんは生麦町内会の役員だったため、「蛇も蚊も祭り」に30年以上も参加していた。A・Gさんは、自分が子供の時にお父さんが「蛇も蚊も祭り」に参加した時のことを思い出して、当時はお父さんがそれほどまでに祭りに熱心に参加するということが理解できなかったし、何の意味もないことだと思っていた。しかし、お父さんが亡くなってから、お父さんの代わりに町内会の役員を担当して、さらに平成9(1997)年に「本宮蛇も蚊も保存会」の会長を担当し始めた。自分がその祭礼の参加者かつ伝承者になるにあたって、「蛇も蚊も祭り」のことをもう一度真剣に考え直した。子供の時に、毎年お父さんが「蛇も蚊も祭り」に参加する姿を見て馬鹿げたことだと思っていたが、成長してお父さんから祭礼のことを教わってから、「蛇も蚊も祭り」を行うことにより疫病が来なくなるのだという意識を持つようになった。このように、家族の意識の影響を受けて、また自分が祭礼の担当者になることによって、その祭礼に対する気持ちが強いものになっていった。

今では、毎年A・Gさんは真剣に祭りのためにいろいろと準備をし、例えば「蛇」製作用の菖蒲が足りない時には、自宅で植えた菖蒲を祭礼に使えるようにしている。筆者がA・Gさんのお宅へ聞き取り調査をしに行った時は、ちょうど「蛇も蚊も祭り」の本番の1ヶ月前であったが、すでにあちこちへ祭りで使うための茅を探しに行っていた。「電車に乗る時も、窓の外を見ては使える茅を探しているよ」とA・Gさんは笑いながらそう語ってくれた。電車に乗る時も祭りのことを考えていることに、筆者の心は打たれた。この祭りがすでにA・Gさんの日常生活の一部になっていることを強く感じさせる。

「蛇も蚊も祭り」当日は神社の前に屋台は1つもなかった。筆者は「なぜ祭りの時に屋台と出前の店を呼ばないの、そうしたら祭りを見に来る人が増えるし、祭り自体もさらににぎやかになるんじゃないの」とA・Gさんに尋ねたところ、「蛇も蚊も」はこの地区の祭り。他の人が来なくてもいい。「蛇も蚊も」は見せるもんじゃない。あくまでもわれわれにとってはね、疫病退散するための地域の行事だからね」とまじめな顔で答えてくれた。A・Gさんにとっては、「蛇も蚊も祭り」は「見せる」

祭礼でも「見られる」祭礼でもなく、単に地域の人々の日常生活の節目として、自分たちがその祭礼を継承する義務があると考えているようである。また、外部からの視線が祭りの有り様に決定的な影響を与えて欲しくないという意識も強く持っている。

俵木悟は現代の祭りの伝承について、「祭りが観光や町おこしの資源として利用されやすいのも、「見る／見られる」という関係性が前提となって、本来その祭りを担うはずではない多くの者を惹きつけ、資本主義の社会の中である種の商品価値を帯びるからにはほかならない」（俵木 2009）と述べ、現代社会における祭りの変遷の方向に言及している。しかし、筆者が調査した「蛇も蚊も祭り」はA・Gさんのように地域の民俗文化として守っている人がいるので、「商品価値を帯びる」商品になる可能性は低いと考えられる。彼らにとって、この祭りは見せるものではなく、自分たちの地域の行事として継承し、伝承する義務があるものにほかならないからである。

一方で、外から見ればにぎやかな祭礼であるが、実際に地域の人々にとっては、その準備や裏方的な仕事がほとんどである。ここに継承集団としての、祭礼に対する伝承の重荷が見える。1日だけの祭りであるが、本番当日の数ヶ月前から続くさまざまな一連の出来事を経験することこそ、地域の人々にとっての祭りである。

(4) 疫病退散要素の変化

「蛇も蚊も祭り」はそもそも疫病を退散するために行われる祭りであったが、現在になってこの祭りにおける疫病退散の要素はどのぐらい残されているだろうか。以下で分析してみたい。

「蛇も蚊も祭り」の中で一番重要な要素である「蛇」を作製する過程から見ると、少し変化があった。まず、「蛇」の舌の製作については、以前は菖蒲で編んで作っていたが、近年菖蒲を手に入れることが難しくなったため、「蛇」の胴体と同じ材料の茅で作る傾向が見られる。菖蒲は魔よけの効果があるという説が昔から東アジアの広い範囲に分布しており、疫病退散祭礼でよく使われる。中国では旧暦の5月5日の端午の節句を行う時に、疫病をもたらし邪気を家に入れないようにするために菖蒲を家門につける習慣が今でも残されている。また、韓国では端午の節句の日に、邪気を避けるためにお湯で菖蒲を煮てその菖蒲湯で髪の毛を洗ったり、菖蒲湯を飲んだりする習慣がある。このように、菖蒲は東アジアの範囲でも疫病退散祭礼に重要な要素と見なされている。しかし、「蛇も蚊も祭り」の場合は、伝承者たちにとっては、菖蒲で「蛇」の舌を作ることがすでに重荷となっており、祭りのある一部の要素を変えざるを得ないことは、祭礼を伝承する過程の中で必ず出てくる問題である。一部の要素を捨てることで、全体の祭礼を順調に行えるようにすることは、1つの側面から見ると祭礼の伝統を犠牲にする部分があるが、その反面、祭礼を継続させるための1つの方法といえるのではないだろうか。

また、「蛇」を巡行させる方法については、「蛇も蚊も祭り」で「蛇」を担いで町内で巡行する際に一番注意しなければならない原則は、「蛇」をバックさせないようにすることである。しかし、町内の人口の増加に従って、町内の住宅は増々密集するようになり、道路も昔より細くなった。そのため、「蛇」を担いで巡行するチームは一軒回った後にはやむを得ずバックしてほかの住宅を回ることになる。このように、巡行する方法の変化は疫病退散要素の1つの変化と見ることができる。そもそも「蛇も蚊も祭り」で「蛇」を各家に巡行させることで、家々の邪気・疫病を吸収して、疫病を退散

させる目的を達する。そのために、すでに1つの住宅の邪気・疫病を吸収した「蛇」が必ず前に進んでほかの家へ巡行することは一番重要な原則である。もしすでに邪気・疫病を吸収した「蛇」をバックさせるとすると、またその家の邪気・疫病を元に戻すことになるおそれがあるからである。

しかし、現在の「蛇も蚊も祭り」は「蛇」を巡行する際に、何回も「蛇」をバックして巡行し続ける。この点から見ると、疫病退散の願望は弱くなっていることが明確に分かる。少なくとも参加者にとっては、「蛇も蚊も祭り」がすでに単なる疫病退散祭礼ではなく、昔のように疫病退散の要素を厳しく守る意味もなくなったものと考えられる。客観的側面では、現実的に環境面での制限があり、さらに、参加者の生活に密接な関連性がなくなるにつれて、疫病退散の要素を守る意識も薄くなり、結果として祭りの中で、疫病退散という部分の要素がなくなり、全体的に祭りの形式が変わることとなった。

次に、「蛇も蚊も祭り」における「蛇」の処理について、昭和30年代以前は船に乗せて東京湾まで運んで海に流していた。しかし、東京湾を通行する船のスクリューによく絡まるということがあって、昭和30年代以降は神社で「蛇」を燃やすことになった。このように、祭りの最後に「蛇も蚊も祭り」の重要な要素である「蛇」を処理する方法の変化を見ると、一見、疫病退散の要素の認識が薄くなっているとも考えられるが、日本以外のアジアの国の疫病退散祭祀の例を見ると、そうではないことが分かる。

疫病の象徴物を海あるいは川に流すことは疫病退散祭礼の中でよく見られるパターンである。中国の江南地域では、今でも「送瘟神」という祭祀行事においては、紙で作った船に疫病をもたらし悪をいっぱい乗せ、それを川を中心まで持っていき、そこで船を流す習慣が残されている（黄強 1993）。また、台湾でも「送王爺」という祭礼があり、疫病をもたらし悪気を船に乗せて流し、疫病退散の目的を達成する（周 1993）。さらに、韓国でも疫病を乗せる船を川に流して、疫病退散の目的を達成させる祭礼は現在でも行われている。このように、東アジアの広い範囲で疫病あるいはそれをもたらし悪や邪気を船に乗せて流すという行事が各地域で行われている。しかし、疫病退散祭祀の形式は疫病あるいはそれをもたらし悪や邪気を船に乗せて流すという形式だけではなく、それを祭祀儀礼の最後に燃やす地域もある。例えば、中国の江南地域では祭祀儀礼の最後に、疫病や邪気を乗せている船を燃やすことがある（周 1993）。

「蛇も蚊も祭り」は祭りの最後に疫病の象徴である「蛇」を海に流していたものを神社で燃やすということに変化した。これは町内会が相談した上で祭りの内容を変えた顕著な例だと見えるが、日本以外の国の疫病退散祭礼を見ると、疫病を象徴する物を処理する形式は海や川に流すこととそれを燃やすことの2つのパターンが存在していて、どのパターンも東アジアの圏内ではよく見られる形式であることが分かった。「蛇も蚊も祭り」の「蛇」を処理する方法の変化は、疫病退散祭礼を存続させる上で発生したことであり、疫病退散祭礼としての特徴がまだ残されていると見ることができよう。

以上に述べたように、「蛇も蚊も祭り」の疫病退散の要素は、疫病退散祭礼の中で少しずつ変わってきた。これらの変化の中で、疫病退散の意味合いをなくすような変化もあるが、疫病退散の特徴を強調する要素も残っている。つまり、一見すると現代社会における「蛇も蚊も祭り」は疫病を退散させるという要素が少なくなりつつあるように見えるが、一方で現代社会に適応する疫病退散の要素を残しているともいえる。

V おわりに

神奈川県「蛇も蚊も祭り」は300年余りの歴史を持つ疫病退散祭礼であるが、現代においてそれを伝承する形や祭礼の内容は少しずつ変化してきた。ただし、表面的な変化は、祭礼に参加する人々の深層的な信仰の考え方の変化と一致していると考えられる。医療技術と現代社会文明の発展によって、病気にかかったらすぐ病院に行くことができるようになって、祭礼を行うより科学の先端技術の方を頼りにするようになった。このような心理的な変化は、今の疫病退散祭礼の形式と内容が変化する重要な原因の1つではないかと考える。

また、先祖から伝わる地域の伝統的な祭礼に対して、いくら社会が発達し外部の環境が変わったとしても、地域の民俗祭礼と信仰を継続して伝承しなければならないという考えが、地域の人々の中にある。

このように、かつて村範囲で重要な疫病退散の役割を果たしてきた疫病退散祭礼は、現代社会の環境で伝統的な要素を追求しながら、より現代社会に適応する姿で地域に伝承されているという特長を持っていると同時に、地域アイデンティティを確立するという重要な役割も持っているものと思われる。

注

- (1) 『古事記』の中で、スサノオに対する表記は「建速須佐之男命」である。河出書房2003年版『古事記』参照。
- (2) 『日本書紀』の中で、スサノオに対する表記は「素戔鳴尊」である。『新編日本古典文学全集』2012年版『日本書紀』参照。
- (3) 奈良時代、日本の各地で編集された『風土記』で現存しているのは、常陸、播磨、出雲、肥前、豊後の文だけであり、ほかの書物などに引用された形で伝えられている『風土記』の文章は「逸文」と呼ばれる。
- (4) 大林太良編『スサノオ信仰事典』の「全国のスサノオ神伝説と神楽・祭礼」により筆者が整理したもの。
- (5) 平成21年横浜市経済センサス基礎調査による。
- (6) 横浜市鶴見区市民局窓口サービス課が平成23年4月1日に統計をとったデータによる。
- (7) 文の中で述べた「茅」の表記は、地元の人による神明神社が「茅」で、道念稲荷神社が「萱」と表記し異なるが、本文では統一のため、すべて「茅」と表記する。
- (8) 「蛇も蚊も祭り」の中の蛇は、神明神社と道念稲荷神社で呼び名が違い、神明神社は「蛇も蚊も」、道念稲荷神社は「蛇」と呼ぶ。本文はそれぞれの神社の祭りを述べる時には、保存会の方の呼び名を使う。

参考文献

日本語

- 浅野明 1998「疫神人形の女神」『民話と文学』
- 井上一稔 2011「平安時代の牛頭天王」『日本宗教文化史研究』
- 大島建彦 1959「信仰と年中行事」『日本民俗学大系・生活と民俗』第7巻 平凡社
- 1985『疫神とその周辺』岩崎美術社
- 1992「疫神祭祀の民俗」『東洋学研究』27号
- 大林太良 2004『スサノオ信仰事典』戎光祥出版
- 河合隼雄 2003『神話と日本人の心』岩波書店

- 笹方政紀 2012「近世疫病神と妖怪——甘酒婆の全国的展開から——」『御影史学論集』37号
- 志賀剛 1981「日本に於ける疫神信仰の生成——蘇民将来と八坂神社の祭神研究」『神道史研究』29号
- 周金龍 1999「祇園祭と王爺祭——日台疫病神信仰を中心に——」『歴史研究』36巻
- 鈴木耕太郎 2010「スサノヲと祇園社祭神——『備後国風土記』逸文に端を発して——」『論究日本文學』92号
- 鶴見区史刊行委員会 1982『鶴見区史』ぎょうせい
- 中村阿契等著 1893『祇園祭礼信仰記』金桜堂
- 西角井正慶編 1958『年中行事辞典』東京堂
- 俵木悟 2009「華麗なる祭り」『日本の民俗9 祭りの快楽』吉川弘文館 p34
- 真弓常忠 2000『祇園信仰』朱鷺書房
- 三崎一夫 1978「小正月のまれ人」『年中行事』有精堂
- 宮田登 2006「俗信の世界」『宮田登 日本を語る4』吉川弘文館
- 茂木貞純 1998「素盞鳴尊信仰の展開——神社本庁『平成「祭」データ』の分析を中心に——」『神社本庁教
学研究所紀要』2月
- 横浜市役所 1985『横浜市史稿』地理篇 臨川書店
- 吉井良隆 1962「牛頭天王・武塔神・素戔鳴尊」『神道史研究』第10巻
- 吉田敦彦 1998『日本神話のなりたち』青土社
- 和田三郎編 1882『浄瑠璃大全』出頭謙之助

中国語

- 黄強 1993「中国江南民間「送瘟船」祭祀活動研究」『民俗芸術』